

# 蔵王山安善寺

◆編集・発行人◆  
近藤龍弘

〒940-0052  
長岡市神田町1丁目4番10  
TEL.0258-32-2811

◆スタッフ◆  
小林国二・小林善秋・高橋潔  
室賀清輝・高橋利春・加瀬由起子  
近藤マリ子・近藤真弘・近藤善信  
後援・株式会社アサヒ  
印刷・(株)北越時報社



橋詰明男氏撮影

ご家族の皆さままでご覧ください

## 迎春

翠巖龍弘

本年が皆様方にとって良い年であるよう祝祷申し上げます。今年も宜しくお願ひいたします。

人間が生きていくのにそれぞれ多様な人生観、価値観をもっております。人それぞれにこれらに影響を与えたものも多々あります。

小説や詩や哲学書などの書物であったり、映画、芝居、芸術や気候風土などの自然環境であったり、マスメディアや政治、経済状況の場合もあります。また、両親をはじめ家族、先生、先輩、友達や職場の上司であることでもあります。自分の人生の師はこの人だという方をお持ちの方々も大勢おられることと思われます。

私も自身のことを思ってみましても、なんと多くの書物や人々から影響を受け、現在の自身の願う生き方、価値観の元になったことかと思惟させられます。

昨年十二月四日に百歳で示寂された長野市、円福寺東堂、藤本幸邦御老師は、私の僧侶としての生き方に大きな指針を示して下さいました。御老師のお一人でございました。御老師とのご因縁を有難く感じ入っております。

御老師には昭和四十七年以来、三十回ほど安善寺へ御出戴きましたが、一昨年六月十二日の大般若法会にお越し頂いたのが最後となりました。御老師は季刊誌四十二号にも書かせて頂きましたが、自作の『花の真実』『仏の慈悲に抱かれて』露のいのちの人の身も善き種まきまで永遠に花のまことを咲かせなれ、また『よい種をまこう、よい種をまけばよい花が咲き、よい実が実る。地球が花に包まれ、みんなの幸せがたくさん実るように、よい種をまこう、いのちのある

うちがたくさんまいておこう』を願行とされ、常日頃「実行しなければ現れない」と言われた通り、いただいた寿命を精一杯生ききった一生であられたのではないのでしょうか。「仏陀の大道、大慈悲心のコース、人を愛し花を愛する真実のみが永遠であることを信じ、愛する衆生のために死ぬ」を本望とし、永遠に受け継がれる心のバトンを次の世代に渡すべき自身の人生の最善をラストスパートで走り、人生のゴール、仏さまの国のゲートに入られた一生ではなかったかと存じます。

平成十六年の中越大震災の後には、御老師から『ほほえみ』『たすけあい』の二枚のポスターをいただきました。厳しい昨今ではございますが、私も微笑、助け合いを大事にし、御老師のバトンの少しでも受け継ぎたいと願っております。 龍弘九拜

一句に参得して透れば、千句万句一時に透る。『碧巖録』

【日々精進(八)】

# 藤本御老師との出会いに感謝し 益々精進いたします

近藤 真弘

今年も「暖冬小雪か」、「いやいや今年は大雪だろう」など雪の話題が多くなる時期になってまいりましたが、今のところ雪も無く、今の時期にはありがたい青空の日も幾日かございました。

そんな十二月の初め、一本の訃報が届きました。私の得度師匠であり、安善寺とは先代の時代よりお付き合いのあった長野県円福寺東堂、藤本幸邦老師御遷化の知らせです。

私が御老師と最後にお会いしたのは妻と共に今年の二月、結婚のご報告に円福寺様にお伺いした時です。その際には結婚の報告を嬉しそうに聞いてくださり、お祝いにと、ご自身の書籍にいつものかわいらしいお地藏さんとお言葉を書いてくださいました。



御老師は戦後、上野駅で二人の戦災孤児を円福寺に連れて帰られ、その後も「愛育園」という児童養護施設を設立され、多くの子供たちを育てられました。その他にも御老師の福祉活動や

社会事業は多岐にわたり、とてもそのすべてをここで紹介することはできませんが、日本のみならず、海外においても活動をされておりました。私も学生時代、御老師が

寄付を集められ、中国の田舎に小学校を建設されたその開校式に随行させていただき、出校式に随伴させていただきました。この式は、出家し仏門に入り、僧侶になるための初めの式であり、御老師は私に仏門という門を通してくださり「泰忍」という法名をいただき、僧侶としての父親のような存在であります。

「はきものをそろえれば心もそろう 心がそろえばはきものもそろう だれかがみだしておいたら そろえておいてあげよう そろすれば世界中の人の心もそろおうでしょう」。安善寺の檀信徒の皆様にはこの詩や、大般若のお説教、年始にお

配りするお言葉のポスターなどで御老師のことを周知の方も大勢いらっしゃると思います。御老師に最期にお会いした際「私は今年で百歳になるが、百十歳までは生きるつもりだ。またまだやりたいことがたくさんあるから」とおっしゃっていました。百歳という御歳で、この意欲的な姿勢に感服いたしました。一般的には百歳と言えは天寿を全うした御歳ですが、御老師には志半ばだ



ったのかとも思います。しかし御老師が残した功績はとも真似できるようなものではなく、改めて私も素晴らしい方にお会いしたと、そしてその方に自分の師匠になっていただいたことに感謝いたします。数々の御功績を持つ師匠に恥じないよう、私自身も益々精進してまいりたいと思います。御老師の御冥福を心から御祈念いたします。

泰忍真弘合掌

# 徹関先生に学ぶ

## —中村先生を偲んで—(二)

西澤 正元

私は昭和三年九月生れで、八十一歳になりました。終戦を陸軍経理学校在学中に迎え、復員して新潟第一師範に学びました。昭和二十三年から教職について、三十九年勤めました。その間、阪之上小学校に勤めていた時、安善寺様との縁ができました。昭和三十一年に担任したのが、先代見龍師が里親として育てられた故福王寺好平(真竜)さんです。好平さんが卒業した後、担任したのが現龍弘師です。この学年は、昭和三十四年秋の阪上校舎の火災で、卒業式を厚生会館で挙げるという不幸に遭いました。それだけに龍弘師たちの学級のまとまりはよくて、同級会は和氣満々です。

私は、八十年の人生を振り返って、多くの人たちとの出会いが自分を育ててくれたことに感謝しています。その中には、縁につながると思われなない不思議な出会いがありました。そんなことを国語サークルの会誌に書いたのですが、それを読まれた龍弘師から「寺報」掲載のお話を戴きました。躊躇しながらもありがたいこととお受けした次第でございます。

古希を迎える年齢になった。年々、故人になられる方が増えて心淋しい思いがする。今年も昨年出した年賀状の返事がなく案じていた中西政次先生が、去る一月二十六日に亡くなられたとの娘さんからの欠礼の葉書が届いた。先生は明治四十年生れ、九十歳の大往生であった。中西先生は、私が姫路市立野里小学校で一、二年生を担当していたいただいた恩師である。戦後、私たち家族は新潟へ帰つたために、先生のお消息を尋ねたいと思ひながら果たせなかつた。

私は、昭和五十四年に県教委勤務から見附小学校長に転出した。翌五十五年の二月、「はくぼく」(見附市に勤務する小・中学の国語教師を中心にする同人誌)第二十二号の巻頭言を書くはめになった。これが「はくぼく」の出会である。しかし、役所勤めからしばらく振りに現場に戻つた私にはなかなか書く

材料が見つからない。困つた揚げ句、ようやく思い当たつたのが中西先生から受けた漢字学習の思い出であった。「徹する」ということと題した一文であったが、たまたま私も知っている著名な国語教育実践家のT校長が教育雑誌に、漢字指導について「漢字を教え込むという意識が先立ち、国語科学習指導全体の中でのバランスのとれた漢字指導という点からいささか気にかかることが少なくない。」知らない漢字を推読する方法の指導を工夫し、その力を効果的に高めたいというような研究報告書はなかなか見られない」という意見を書いていたので読んで、中西先生の漢字指導を振り返り、いささかの感想を付け加えて書いたのである。中西先生は、毎日帳面(當時はノートとはいわなかった)ようだ三枚の漢字の書き取りを宿題に出された。昭和九年頃、マス目の帳面があつ

たかどうか覚えていないが、毎日三枚を漢字で埋めるのは低学年の子供にとつてはなかなかの負担であった。しかし、私は、その難行が習慣化するにつれて、だんだん漢字への関心が高まっていった。その関心は高学年まで続き、私に次のような力を付けてくれた。

- ①既習・未習を問わず、間違つた字形の漢字を書いたり見たりすると、直感で変だなと気づくようになった。
- ②新しく出た漢字でも、かなり正しく推読できるようになった。当時は新聞や本にはルビ付きの漢字が多かつたので、自分の推読の誤りを正すことができて、未知の漢字へ挑戦する意欲が沸いてきた。
- ③漢字への関心が漢語へと広がり、音訓や表意文字の意味や情感に憑かれるようになり、ことさらむずかしい漢語を使って作文したり、文語文や漢文にも興味

味が広がった。中西先生がどういう考えで一、二年生のうちからきびしい漢字練習を課せられたのか分からない。昭和初期の国語教育がまだ読み書き中心の前時代的な教授手法から抜け切れないで、書き取りも慣習として行われていたとも考えられる。しかし、理屈でなく覚え込ませる。そんな機械的な国語学習が出发点になって、国語教師の末席に連なる私を育ててくれたことは間違いない。

ここで私の言いたいことは、勿論、機械的、強制的な練習学習をよしとして薦めることではない。私たちは一芸に秀でた職人や芸術家、スポーツ選手が自分の持つ技術や技術を「手が覚えている」とか、「体が覚えている」と言っていることを知っている。彼らの手が、体が覚えている高度な技術は、厳しい習練を繰り返すことによつて身に付いたものである。しかも、その厳しい習練は師匠と弟子との信頼と愛情があつて成立している。私は、国語学習においても同じようなことが言えるのではないかと考えたのである。教える側からは、「指導に徹する」、「実践に徹する」、「教えられる側からは、「書くことに徹する」、「読むことに徹する」という教授者と学習者相互の教育作用があつて、ことばを使う技術が定着し、ことばへの感性が育っていく。それがやがて学習者の生きる力になるのではないか。私は、毎日漢字の書き取りを宿題に出された中西先生に、指導者としての「徹する」姿を見たのだと理解した。

ノスタルジックな精神主義と言われるかも知れないが、私は「徹する」ということばの持つエネルギー、シシユな迫力、怠情を許さぬ厳しき、物事をやり抜く気力、根性が学習面だけでなく、生活面からもだんだん遠のきつつある現実をみて、「はくぼく」に集う国語教師たちへの期待として書いた一文であった。

以下、次号へ続く

# がんばれ！日本だ！

## —ベルリン世界陸上観戦記—

沼田 金之

1999年セビリアに始まり、2001年エドモントン、2003年パリ、2005年ヘルシンキ、2007年大阪と趣味の世界陸上観戦で訪れたが、今夏は八月十四日ドイツの首都ベルリンに降り立った。1979年大学卒業間際にバックパッカーの欧州一人旅でチェコから列車に乗り込んで以来、三十年ぶりである。

1989年の壁の崩壊から二十年という節目の今年、その変貌ぶりも楽しみに訪れた。

【ベルリン】。不可思議な町、魔都と感じた。共產圏時代の鬱積したもの(旧東ベルリン)が、まだ東西ブロックの最前線としての緊張感からの解放(旧西ベルリン)が、何か活動し始めたマグマの

ように、そこはかとなく沸々と爆発しつつあるような感じがした。日本からの留学生らによると、既に先進的芸術家はニューヨークからこのベルリンに移ってきているとのこと。なるほど。

今回、ベルリンで使ったドイツ語は、簡単な挨拶以外、ピア・フォン・フォス(生ビール)くらい。よって、英語を使ったが、これがあまり通じない。ただ通じないというところに「すみません」と言ってくるのは、やはり第二次世界大戦敗戦国なのか。フランスではありえない。

小生が英語で話しかけると「あんた、アメリカ人か？」と聞いてくるくらい。英語圏の人間(もしくは共通語が英語の人間同士が電車の中で大声で(英語で)会話をしているのも、またそれを許しているのも少々奇異に感じた。人はいたって親切。人なつっこい感じはした。ただあまり融通はきかない。列

には並ばないなど、公共マナーはいまいち。ドラッカーが多く、普通の女性が大瓶ビール持ち飲みながら歩いていることも。観光は陸上競技主体ゆえほぼ時間なし。またその気もあまりなかったが、陸上競技午前の部がない日にベルリン動物園・水族館へ。案内書、パンフレット、地図などの無料配布なし。しかたなく、記念にと有料の案内書を購入。トラ、ライオンなどなるべく彼らの住んでいるような環境にして入れているため、当然ながらお客に見えない事も多い。主客転倒？ これも文化か。寝ているクヌート(子供の頃から育てたこの動物園の目玉の白熊君)と共に写真を撮って帰ってきました。



ごひいきのニコラ・サンダースとツーショット (イギリス、2007年大阪大会 400m 2位)

6m台の攻防等々、それらはどこへ行ってしまったのだろう。そのうやむや感を突き破ってくれたのが、そして更に突き抜けたようにしているのがポルトなのだろう。人類の夢を乗せて走り、幅跳び、そして四百メートルに臨めばその世界新もすぐ聞けるだろうと思われる。

【日本、経済、そして平和】。女子マラソンの尾崎好美の2位はよくやった。村上幸史のやり投げ3位も立派。やはり村上水軍末裔は強かった。これでやり投げに今後良い日本選手が続いてくれればと思う。

ただ終盤まで日本選手の活躍なし。主なスポンサーはすべて日本企業。即ち、この世界陸上は日本の金で成り立っている。しっかりとしろ！日本選手団！最後に漸く救われたのは今回もまた同じ。これでいいのか。

閉会式、各国国旗を持って入場したのはボランティア。閉会式で労をねぎらうのはいいが、選手ではなく三千人のボランティアの行進。国際陸上競技連盟会長の挨拶

も、次回開催地韓国テグの民族舞踊も、ボランティアの騒ぎで聞けず、見れず。何か違うのではないか。プログラムを含め、今回が一番簡単。よほどドイツは経済的に困っているを見た。

女子マラソン当日、観戦場所確保のためにスタートの三時間前には現場に赴き、真青に晴れ渡る好天の中、ブランデン門を行ったり来たり。三十年前のどんよりした冬空の下、東西の壁により閉鎖されたブランデンブルク門の前で写真を撮ったことをふと思い出した。その違いと平和の尊さをつくづく感じた。

その確保した席で、両手に日の丸(額にも日の丸ハチマキ)を掲げ、「パワーズ」(小生が代表を務めるローイングクラブ)のユニフォームTシャツをまとった応援姿を世界に発信した。

頑張れ、日本！ がんばれ！ 今年七月末から八月初めにバルセロナの欧州陸上選手権に行ってくる。その頃世界はどうなっているか。

今年七月末から八月初めにバルセロナの欧州陸上選手権に行ってくる。その頃世界はどうなっているか。

# 寮母さんとの感激の再会

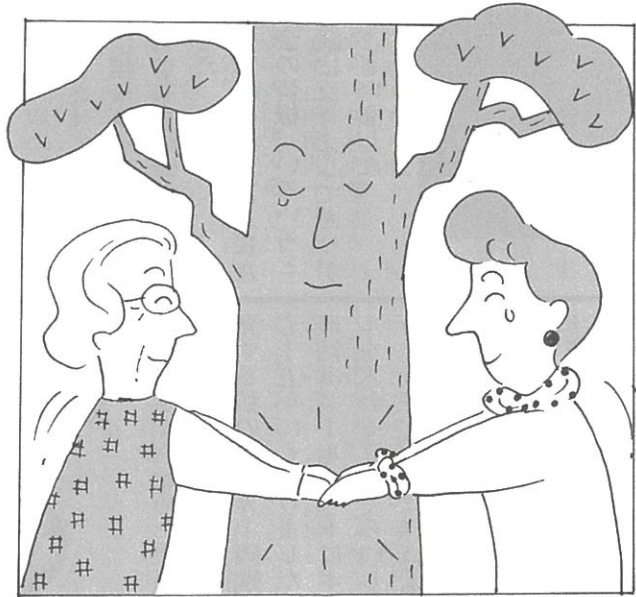
写経会会員 大平 昭子

母を平成四年二月に黄泉の国へ送り一年半が過ぎた頃、心の余裕も出来、ふと昭和十九年八月から二十年二月まで約七ヶ月、学童疎開した日蓮宗善住寺のことを思い、お世話になった御前様のお墓参りがしたく主人と相談し行くことに決めました。

思い起こせば四、五、六年生が親と一緒に校庭に集まり、夜行列車に乗るため暗くなつてから親と別れ、電車で乗り継ぎ新宿から甲府、私鉄の小さい電車に乗り換えて青柳駅で降り、どの位歩いたか忘れましたが、私は不安と期待でどんなお寺だろうと思ひながら黙々と歩いていったようです。

これから一緒に生活、御世話してくださる寮母さんがきれいな方で、子供ながら見入っていました。今思うと、あの当時まだ二十二才だったのに大変だったことでしょう。

さて、行く段になると私



鉄も廃線になり、甲府から見延線で鵜沢口で降り、タクシーに乗ると運転士が善住寺を知らずやっとお寺に着きました。五十年ぶりに見る大門がこんなに大きいとは思ひもよらず、奥の方に立派なお寺が見えてしばらくは佇ちつくしました。

いよいよ東京へ帰ることになり、記念にお寺を背景に松の木の下で集合写真を撮りました。その松がきれいに手入れされた姿で私を迎えてくれました。この松が毎日、私たち生徒を見守っていたのかと思うと感慨無量でした。

突然の訪問なのでブザーの前でドキドキしながら押すと、「どなたですか」と男性の声。私が「昔、学童疎開でお

世話になった者です」と答えると、「どうぞお入りください」とのことです。奥から御住職が出て来られ「今、家内を呼びます」とブザーを押され、私は初めてお目にかかるので非常に緊張していました。そこへニコニコと笑顔で現れた方が、五十年前の寮母さん。思ってもいなかった現実に土間中に響き渡るような大きな声で「えっ」と一言。気も動転し、次の言葉も出ず、たゞたゞ涙が溢れるばかりでした。

部屋に通され、御住職から当時は東京の世田谷連隊に入隊、私たちが居た時は休暇で来られ、疎開児童のことは知っていたそうです。まず写真を出し「これが私です」と言う。「よく覚えていますよ」と言ってくださり、本当に来て良かったと思ひました。私を覚えてくださった理由は、着いたその夜、扁桃腺で三十九度の熱を出して看病してもらったからです。

お二人で「遠い所、ご主人と来て頂き有難うございます」と丁寧挨拶され恐縮しました。本堂にお土産と

志を供え、七ヶ月間、朝六時から廊下へ座り御前様と毎日読経したことを思い出しましたが、お経はすっかり忘れていました。

御前様のお墓を案内して頂き、七ヶ月お世話になつたこと、今までのご無沙汰を詫び、ゆつくりとお参りさせていただきました。

## 読者からの便り

絆 日野 幸子

母が三十年前に逝き、父も二年前八十七歳で他界しました。残された兄弟姉妹としては思ひ出もさながら現実には直面しました。兄弟だけなら仲良しでいられても、なかなかむずかしいものです。それでも諸々の問題を解決して、来年の三回忌には皆で顔を合わせることにしています。実家を継いだ弟夫婦には大変迷惑をかけましたが、絆を守ることで出来ました。



「兄弟姉が多くて良いですね」と言われるたびに、皆の絆を思い起こすものです。仲良くする事は信頼のあかしです。

其の実は言句の上にならざるも、亦言句の中を離れず。『碧巖録』

# 第十三回 KAKA笑の会報告

## 菩提寺でのコンサート 田中ケイ子

前号で紹介して頂きました KAKA笑の会『異文化コンサート』に、昨年の十月三十日各分野で活躍しています仲間達六人、バリトンの旭さんの運転で安善寺に伺いました。

一部は日本舞踊・ソプラノ・インド舞踊、二部はバリトン、最後に日舞と各コラボレーションで二時間のコンサートをさせていただきました。

私が四才の時に父が他界、それから母が日舞の師匠として生活をしてまいりましたが、六十四才の時に交通



事故で踊れなくなり、後を継ぎ日舞の仕事が続けて参りました。昨年七月、母の十三回忌に安善寺に伺いましてコンサートの話になり、『田中ケイ子と仲間達・異文化コンサート』が実現いたしました。

先祖・両親の菩提寺の本堂で踊らせて頂きました(特に越後獅子と佐渡おけさ)有意義で感慨無量の時でした。

安善寺の皆様、KAKA笑の会の皆様、いろいろとお世話になりました。ありがとうございました。

## 私のアルビ観戦記 "がんばれ アルビ"

高橋 珠江



小学生から始めた次男のサッカーの「追っかけ」に端を発する私のサッカー観戦歴も十五年にもなりました。最初はゴールネットにボールを入れることぐらいしか分からなかったのに、日本、ドイツと二度のWカップも観戦に行き、今じゃいつぱしの解説者(?)。Jリーグを夢みてボールを蹴っていた次男の、小学生の泥んこサッカーから高校サッカーまで、いつもワクワクドキドキしながら見守り、母と一緒に夢を楽しんできました。我が子のサッカー

が一番、アルビのサッカー、そして日本代表。これが私のサッカー観戦の序列です。さて、Jリーガーになると言っていた次男も高校でサッカーを終わりにし、現在はアルビ観戦のみとなりました。試合のたび、オレンジのユニフォームを看に

して、とても美しいスタジアムです。そして、このビッグスワンの中で、まだ残雪の三月から木枯らし舞う十二月まで長くて熱い戦いが繰り広げられるのです。「今年のアルビはちよつと違って強い! だって負けないもん」親戚の浦和レ



まとい亀田まで高速道路を駆け抜けて、ビッグスワンに一直線。「俺たちのいがりたる!」と応援歌を歌い、プレーに「喜」憂。ビッグスワンのスタジアムは、屋根を白鳥が羽を広げて空を飛ぶ姿をイメージ

ズよりいつも上位だよ」なんて言っていたのに「J1、3位まで残ってACL出場を!」の願いも空しく失速し、終わってみれば浦和レッズにも追い抜かれ8位。今年アジアのどこかの国まで応援に行くつもりだっ

たのに...でも、ちよつとい夢をみさせてもらい一年間楽しみ、今季に思いをはせている今日この頃です。他県の知人には、「スポーツ後進県の新潟では他になにもないから」と言っていますが、アルビはお米と日本酒に並ぶ新潟の自慢。だと私は思っています。がんばれ アルビレックス!

### お別れ

(平成二十一年九月〜十月末)

村上政衛様 十月十六日寂

長岡市松葉町

江口ハナ様 十月廿六日寂

新潟市西区

中山満枝様 十一月八日寂

長岡市上条町

須藤秀雄様 十一月十四日寂

北海道紋別市

佐田明子様 十二月七日寂

東京都目黒区

ご冥福をお祈りいたします。

# 灯愁歌旬 [二十四話]

## ガンダーラ

加瀬由紀子

私の手元にある写真集、『AFRICA』。ブラジルの報道写真家、セバスタチャン・サルガドの代表的な作品集である。神保町の洋書店で見つけて躊躇する価格ながら、どうしても欲しい一冊だった。サルガドの写真集は、残念ながら国内で発売されているものが殆どない。他に私が手に入れた二冊も、友人の話ではいずれも品切れ状態で『AFRICA』については倍のプレ

ミアが付いているそう。師走も近い十一月のある日、会議で上京する機会があった。もう一つの目的は恵比寿の東京都写真美術館で開催中のサルガド展を観ることだった。

どちらかといえば目立たなかった恵比寿駅が、再開発で近代的な駅に変わって早十数年。動く歩道に乗って近代的な通路を延々と行けばやっと目指す美術館に着く。ちなみに、その先にあるホテル『ウェスティン東京』はヨーロッパのクラシックなインテリアで、ゆつくり寛げるロビーが快適だ。但し宿泊となるとなかなかのお値段で、常にロビーのお茶だけにとどめているのが少々情けない。

平日にもかかわらず結構な入館者のいる会場で、いよいよ現物(サルガドの作品は皆大きい)を観る。

「ウーン！ さすが、サルガド！」砂漠を渡ってくる乾いた風を、飢えて濁った瞳の野牛から漂ってくる死臭を、そして何より熱い哀しみと怒りのメッセージを、

モノクロの写真は問いかけていた。

ときに私は、報道写真についてかなり関心がある。好きな日本の写真家は、野町和嘉氏。私の書棚に『モロ

私を誘う。惜しむらくは、『ウェスティン』の宿泊料金と同様、写真集の価格だ(高く売りつけるのはアイドルのヌード集だけにしてもらいたい)。サルガドが乾いた西洋



ッコ』『サハラ』『チベット』など六冊の写真集があるのだが、特にサハラ砂漠の遊牧民を撮ったシリーズは、民族への讃歌が凝縮され、開くたびに遥けき瞑想へと

的な視点でのシャッターだとするなら、野町和嘉は東洋的なアングルが好対照だ。さて、ステイヴ・マックリーも気に入っている。『MONSOON』という写

写真集を持っているが、開くと南アジアの温く湿った塊が私の目にビュンビュン飛び込んでくる。これも洋書で、神田の古書街で手に入れた代物。探していた本に出会えた楽しみは、値段などどうでもよくなるのが恐ろしい。

インターネットでマックリーの英文サイトをぜひ開いて欲しい。(『マゲナム』という所属グループで検索も可)代表的なポートレート

『アフガニスタンの少女』の翡翠色の瞳に誰もが吸い込まれてしまふに違いない。戦時下のアフガニスタンに原住民に変装し、カメラを服に縫いつけて入国、そして十数年の時を経て難民キャンプで成人した少女と再会するエピソードも有名だ。

私が写真に興味を抱いたのは、東京で記者として働いていた頃、集英社の『モア』という雑誌の創刊パーティだった。そのパーティのオープニング演奏に、まだ無名のグループ『ゴダイゴ』が「ガンダーラ」を歌っていた。華やかな会場とかけ離れた、

地味で小柄な年配の男性と目があって話しかけると、彼はニヤリと笑って「私が撮っている写真の名がガンダーラですよ」と応えた。それが写真家並河万里氏との出会いであった。その後、トプカピ美術館の取材でトルコに長逗留されていると聞いたが、三年前、ガンで逝去された。西域の写真をたくさん残しての旅立ちだった。今も彼の魂はシルクロードを撮り続けていることだろう。

ときにもう一人、気に入っている報道写真家に広河隆一氏がいる。高放射地帯でのチェルノブイリのシリーズ、戦車の陰からのパレスチナ取材、と体を張ってのファイナダーは見る者を戦慄させる。彼が編集する雑誌『DAYS JAPAN』が不景気の昨今、存続の危機を迎えている。

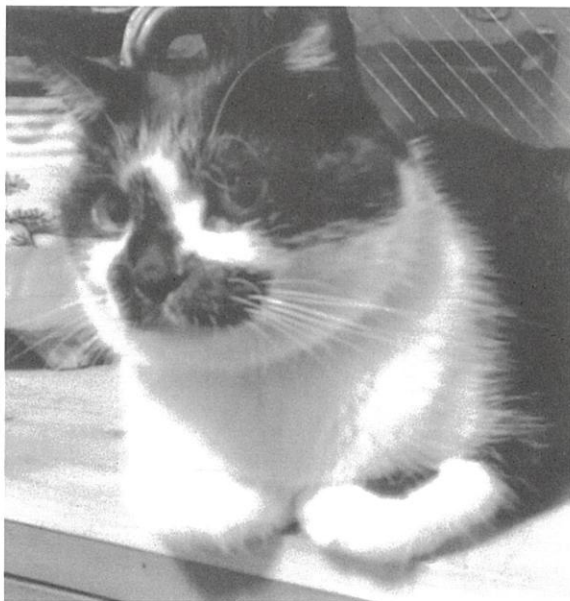
どうか心ある皆様、この怒れるカメラマンの月刊誌を購入してあげてください。お問い合わせは編集部 03-3322-0233かサイト www.daysjapan.net お願いします。

ボブの独り言

# 昨年はいろいろありました 今年はどうかな...

あけましておめでとうございます。

先号の季刊誌が発刊されてから三ヶ月半、僅か三ヶ月でもいろんな事があつて何かからお話したらよいのでしょうか？ やはり、お兄ちゃんの居ない？ 私には聞いても難しくてうまく説明ができませんのですが、新婚なのに単身で十二月の中旬に渡米してしまったことでしょうか？ でも、今の時代に...と思うでしょうが、電波が通じないような山の中にある修行道場とか？ みんな「？」ですが、本当に私には？ です。でも、きつと一回りも二回りも大きくなって帰って来てくれるのでしょうか？..



ぶ大手術を受けました。それもKAKA笑の会のコンサートの日です。でも皆さん慣れてるので、お母さんが居なくとも大丈夫でした。

泊二日の入院で、縫合した箇所もガーゼを当てることもなく、回復も早く晴れた日には庭で駆け回っています。

同時期に私も事故に遭い、腰の神経が侵されてしまい「もしかしたら尾が壊死してしまつて尾を切らなければならぬ」とまで言われたのですが、久美子さんの献身的な介護のお陰で最悪の事態を免れました。でもいまだに時々レーザー治療に通っています。

あまり外に出歩かなければ良いのですが、外の楽しさを知ってしまったら、部屋で静かにしているなんてつまらなくなつて...。十二月の中頃でしたでしょうか？ お母さんが季刊誌の原稿の締切も間近に迫り、夕食後パソコンに向かつていましたら「外、真っ白ヨ！」と久美子さんの初雪に感激した声が聞こえてきました。

昨年秋に森繁久彌さんが亡くなりました。「森繁と言の後ろ頭をたくしシーンがあります。また多くのタレントが出演している番組の中で、一人を皆でたたいている場面も見られます。これは関西のタレントが多く東京に進出してからよく見られる傾向のようです。落語家の桂歌丸が以前、私たち噺家は決して相手の話をさえぎったり、体の欠点を笑いの「ネタ」にはしません、と言つた事を思い出しました。昨今、学校でのいじめが問題になっていますが、毎日皆が見ているテレビのなかで、平気でいじめを放送しているのではないのでしょうか。今のお笑い番組を法律で規制しても良いのではないのでしょうか。

### お便り原稿用紙

季刊誌では、壇信徒・読者の皆さまと、ごいっしょに誌面をつくりながら、コミュニケーションを深めたいと思います。ハガキまたはお手紙、ファックスなどで、お気軽にお便りをお寄せください。お待ちしております。

- 原稿の例
- 思い出話／ご家族、ご先祖、お寺の思い出話など。
  - 私に言わせて／家事や子育てのお話、身近な出来事など。
  - 教えてください／仏事やしきたりや疑問（編集部や住職が答えします）など。
  - 嬉しい・楽しい嬉しかったこと、悲しかったこと、怒ったこと。

夜七時台に一度、駅前シリーズを放映してもらい、本当の芸人さんの演技を、今のタレントも含め全国民に見てもらい、喜劇の神髄を感じてもらいたいと思います。では本年もよろしくお祈りします。 室賀清輝

第四十九号、春号は平成二十二年三月十日(水)発刊予定です